

歴史の交差点

神田外語大学客員教授 山内昌之



幕末に起きた重大事件に、文
久2（1862）年の島津久光
の率兵上京と寺田屋事件があ
る。尊攘激派の藩士を肅清した
事件の頃に、汾陽次郎石衛門と
いう江戸留守居役が登場する。

文
久2（1862）年の島津久光
の率兵上京と寺田屋事件があ
る。尊攘激派の藩士を肅清した
事件の頃に、汾陽次郎石衛門と
いう江戸留守居役が登場する。

名で「かわみなみ・りしん」と
読ませたのだろう。620石と
いうから、かなりの高禄であ
る。その子孫の汾陽光東も、土
木技術に長けた者たちを束ねた
のではないかと、松尾氏は推定
している。

秀吉の死を知らせ、日本軍が撤
兵を急いでおり、食糧も欠乏す
る内情を知らせた。これは、島
津義弘の意志なしでは進められ
ない。義弘が豊臣政権の撤兵命
令が届く前から、自発的に講和

薩摩の中国人藩士

これは「かわみなみ」と読む。
珍しい姓ではないだろうか。
汾陽は久光の幕政改革など政
変構想に消極的だったため、久
光の評価は厳しかった。「汾陽

た。明国人だったのである。永
禄2（1559）年に京泊（現
薩摩川内市）にたどり着き、島
津義久に仕えている。唐代に汾
陽王に封じられた郭子儀の子孫
陽王に封じられた郭子儀の子孫
陽王に封じられた郭子儀の子孫

島津家にはかなりの中国人家
と撤兵の交渉を始めたのは、島
津家の国際感覚と外交センスの
高さを物語る。義弘は、泗川の
戦いや露梁の海戦で明・朝鮮軍
を破ったことで知られる。

もっと重要なのは、明将の茅
国器やその部下・史世用らと連
絡を取り合い、国器の弟・茅國
科を人質にして、朝鮮半島から
整然と撤退したことだ。義弘は
徳川家康とともに、秀吉による
不義の戦いの批判者であった。

この推論を紹介するには紙幅
が限られているが、日本軍の朝
鮮撤退の理由をはっきりしてい
る。情報通で外交力にたけた義
弘の力量だというのは、当時の
政治家と後世の歴史家に共通す
る見方である。家康が言うよう
に、無事撤退こそ真の「勝利」
であり、外国と日本に類例を見
ない軍功にはかならない。

た。しかし貿易については島津
と違う考えを持っていた。家康
は金印と勘合による国家管理型
の貿易を好んだが、島津は自由
に東シナ海を往来できる自由貿
易を望んだ。松尾氏は興味深い
ことに、これを「倭寇的状况」
と呼んでいる。

（やまうち まさゆき）